

# フィリピン

ながの よしこ かわなか たけし  
永野善子・川中 豪

- はじめに  
I 歴史・社会  
II 政治  
III 経済・農業

## はじめに

本稿の対象期間(1986～94年)はフィリピンにとって、1986年の2月政変に始まる激動の時代であった。政治的不安定と経済の停滞を経験したこの時期は、独立後フィリピンの政治、経済、社会にとって大きな転換期でもあった。こうした中、日本においては、フィリピンへの注目が高まるとともに、フィリピン研究はその厚みを増したと言えるだろう。本稿では、「転換期のフィリピン」という状況を念頭に置きながら、この間の日本のフィリピン研究をI. 歴史・社会、II. 政治(以上、川中豪担当)、III. 経済・農業(永野善子担当)の3分野に分けて、レビューを試みたい。(川中 豪)

## I 歴史・社会

歴史・社会の分野における中心的主題のひとつとして、フォーク・カトリシズムをあげることができよう。スペイン植民地統治とともに持

ち込まれたカトリシズムが、フィリピンの伝統的社会に受容される過程で変容し、土着化したフォーク・カトリシズムとしてフィリピン社会の基層を形作っているという認識に基づいて、このカトリシズムがフィリピン社会を解明するカギとして研究された。歴史学の分野でこの主題に取り組んだ代表的なものは池端 [1987] であろう。1896年～1902年のフィリピン革命をカトリシズムとの関係において詳細に検討したこの研究は、革命の原因論としてだけでなく、イデオロギー論、動員論、目的論の各視点からカトリシズムの果たした役割を解明している。その後の一連の研究、池端 [1991, 1994] も同様の問題意識に基づいている。

また、人類学のアプローチからこうしたカトリシズムの役割に焦点を当てた研究として、清水 [1991]、玉置 [1989]、寺田編 [1989]、寺田 [1991] があげられる。教育におけるカトリシズムの研究としては市川 [1993] がある。

その他の主題に関しては、歴史学の分野において、日本による占領期の研究が進んでいる。日本のフィリピン占領期に関する調査フォーラム編 [1994] は占領に関わった人々のインタビューの記録であるが、史料としての価値は高い。フィリピン人研究者からもこの主題に関してホセ [1993] などの研究が出されている。また、

中野 [1991] などコモンウェルス期を中心にアメリカの権益とフィリピンの社会経済エリートとの関係を研究してきた中野は、日本のフィリピン占領終結をアメリカによる「再占領」ととらえその政治過程を分析した中野 [1994] を発表している。

この他に注目されるものとして、フィールドワークや一次資料の詳細な検討をもとにダバオのバゴボ社会の変容過程を歴史的に研究した早瀬 [1986] がある。早瀬は、さらにベンゲット道路建設に従事した日本人移民を扱った早瀬 [1989] において、これまでの移民のイメージの再検証と移民の実像の描出を試みている。また、フィリピンにおける華僑・華人社会を研究した廖 [1993] は、中国語史料を駆使し、1920年代後半から1950年代初頭の時期の在比華僑左派組織（親共産党）の変容を軸として華人社会の変容の解明を行なっている。

人類学では、大崎 [1987]、合田 [1986]、清水 [1990]、宮本 [1986] など、長年のフィールドワークをまとめた研究が出されている。大崎は北部ルソン山岳地帯のポントックをフィールドとし、この社会を自律的な社会として描き出している。同じポントック社会を調査対象とした合田は、その社会構造と世界観を親族制度と宗教儀礼を中心として記述、分析している。これらはともに北部ルソン山岳少数民族の代表的研究と言えよう。一方、清水は「出来事」が共同体社会に受け入れられる過程に着目し、それによってネグリート社会の固有の存在様式の解明を行なっている。また宮本は、社会構成、宗教儀礼、慣習法の3点からミンドロ島のハヌノオ・マンヤンの世界を描き出している。

この他に、親族関係を中心としてフィリピン

社会の解明を行なってきた社会人類学者グループの業績として菊地靖編 [1989] がある。また、フィリピン人研究者との共同研究である牛島；Zayas 編 [1994] は、これまで見落とされがちだったビサヤ地方の漁村に関して、人類学者の目から解明を図った研究である。川田 [1992] もこの研究の一環として位置づけられる。さらに、スルー、タウイタウイなど南部の海域文化圏の研究も盛んになってきており、床呂 [1992] をはじめとして、精力的なフィールドワークに基づく若手研究者による研究が見受けられる。

一方、社会学の分野では、大坪・池田 [1987] が、政治学・行政学の関心をも含めた包括的なバラガイ研究を行なっている。この分野における研究が少ない中で、非常に意義ある業績と言えるだろう。

## II 政治

1986年の2月革命がこの分野に与えた影響は大きい。革命のダイナミズムの解明とともに、革命以前のマルコス体制がどう評価されるのか、また、革命以降の政治体制がマルコス以前への回帰なのか、あるいは新たな体制の出現なのか、という問題に関心が集中した。事実関係の記述のみもしくは印象論的記述などに終始した論説も多かったが、以下のような本格的な政治研究が多く見受けられる。

まず、戦後フィリピン政治史を包括的に捉え、マルコス体制、2月革命、アキノ体制を分析したものに浅野 [1992] がある。これは長年アジア経済研究所で動向分析に従事してきた中で、事実関係を積み上げる作業によって、フィリピン政治史を解き明かそうとした試みである。ま

た、浅野・福島編 [1988] も、フィリピン政治の風土、マルコス体制の分析をはじめ、2月革命の過程、アキノ政権初期の状況などを、動向分析を土台として、実証的かつ包括的に描きだしている。

マルコス体制の分析としては、吉川 [1987b] が「近代的政治制度に名を借りたきわめて伝統的な家産制国家」として、マルコスの作り出した政治体制の解明を試みている。白石 [1987] も「マルコス＝ロムアルデス『王朝』」としてマルコス体制を捉えており、基本的には吉川と同様の枠組を用いている。また、片山 [1987] は、官僚制に焦点を当て、マルコス体制における一元的パトロン＝クライアント関係の成立とその構造を明らかにした。

2月革命の分析としては、藤原 [1988] が代表的なものといえよう。藤原はフィリピンの民主主義を、(1)寡頭民主制、(2)ブルジョワ民主制、(3)参加民主主義、(4)革命的民主主義に分類したうえで、それを担う運動の合従連衡と競合によって2月革命以前までの政治状況が説明されるとし、こうした合従連衡と競合のデッドロックの中で大統領選挙が持ち出され、これを契機に形成された一時的な「市民社会」によって革命が推し進められたと分析している。

先述の清水 [1991] は、文化人類学者の視点から2月革命を捉えたものとしても注目される研究である。その根底にはフォーク・カトリズムに関する問題意識が存在しており、フィリピンの政治研究に斬新な視点を与えた。また、木村 [1989] は政党という視点から2月革命の検証を行っており、バタンガス州での長期のフィールドワークを背景にした厚みのある研究となっている。

この他に2月革命を考察したものとして田巻 [1993] があるが、「従属」、「国家の相対的自律性」、「支配の正当性」などの理論的枠組によってマルコス体制と2月革命の解明を試みている。

一方、2月革命以降の政治体制の解明を念頭に置きつつ、2月革命そのものの以外の主題を取り扱った政治研究も増えている。行政に関しては、片山 [1990] がマルコス政権と同様に、アキノ政権においても「具体的な人格の二人関係」に基づいた伝統的組織論理が強い拘束力をもっていることを明らかにしている。藤原 [1989] は、「国家なき議会政」をフィリピン政治体制の前提とし、マルコス政権期の行政の肥大化と一元的な情実人事、さらにアキノ政権成立以降の「腐敗の民主化」による多元的なクライアントリズムの出現を指摘している。吉川 [1987a] は、大統領の官職任命権に着目し、マグサイサイ政権期、ガルシア政権期を対象として、政治的クライアントリズムの中で大統領の官職任命権が果たす役割に関して、詳細な研究を行なっている。

政党に関する研究としては片山 [1988] と藤原 [1993] がある。前者はアキノ政権期の政党の再編過程を追いながら、その離合集散の論理を軸として、アキノ政権期の政党制と以前のそれとの比較を行なっている。後者は、フィリピンにおける政党の存在そのものに疑問を提示し、そもそも実質的な意味で存在しなかった政党が、アキノ政権期にはさらにその解体が進んだと結論づけている。

エスニシティー研究の観点から、南部のイスラム教徒の問題に関心を向けた研究も現われている。山影 [1988] は、イスラム教徒の政治運動を題材とし、「モロ」という概念を軸としな

がら、歴史、文化、国際関係の視点から総合的なエスニシティー研究を試みている。インタビューと一次資料に基づいた緻密な実証研究である川島 [1992, 1993] は、フィリピン政府の国民統合政策との関係でイスラム教徒の政治運動を取り上げている。

外交に関しては、日比賠償交渉に関する2つの大きな研究がまとめられている。ひとつは大野 [1986] である。これは長期にわたって行なわれた現地調査の成果であり、国際環境の変化の中での両国の交渉の展開を詳細に描き出している。もうひとつは、一次資料の詳細な検討に基づいた吉川 [1992] である。この問題に対し長年関心を向け、地道な業績を築き上げてきた吉川の研究の集大成ともいえるものであり、実証的に日比両国の賠償交渉をめぐる外交政策決定過程の比較を行なっている。

### III 経済・農業

経済・農業分野の研究はつぎの7つのテーマに分類・整理される。すなわち、(1)1980年代の規制緩和政策を軸としたマクロ経済分析と長期の経済的停滞の諸要因の解明、(2)産業政策と企業集団の分析、(3)規制緩和政策の財政・金融部門への波及過程の考察、(4)「緑の革命」と農地改革が農業・農村経済に与えた影響の追跡、(5)都市インフォーマル部門や小規模経営に関する考察、(6)海外出稼ぎ労働論、(7)日比経済関係を軸とした援助論、である。

以下、各テーマごとに研究の流れを追ってみよう。

アキノ政権誕生以後、経済学者が最も関心を寄せた研究課題は、マルコス政権による工業化

の失敗が規制緩和政策のもとでどのように是正され、フィリピンが新たな経済発展の糸口を見出すのかにあった。たとえば福島編 [1989] は、アジア経済研究所が刊行した「アジア工業化シリーズ」の一環として、フィリピン工業化の軌跡をたどり、その担い手や主要産業の動向の把握につとめた。

また、アジア経済研究所とフィリピン大学経済学部およびフィリピン開発問題研究所 (PIDS) との一連の共同研究の成果として、モンテス；小池編 [1988]、坂井；モンテス編 [1989]、坂井；カンラス編 [1990]、リム；野沢編 [1992, 1993]、バリサカン；野沢編 [1994] が公刊された。この研究報告は英文でも発表されており、近年の日比共同研究の新しい形態といえよう。ここでは、マクロ経済政策、貿易・産業政策、規制緩和と財政・金融政策、地方分権化の地域経済への影響、農村開発と NGO (非政府組織)、環境管理などの研究テーマが網羅され、第一線で活躍するフィリピン人経済学者たちの論文が収録されている。

他方、森澤 [1993] は、著者の約10年にわたるフィリピン工業化研究の集大成である。森澤は、マルコス政権の工業化政策の特徴が、輸入代替から輸出指向への全面転換ではなく、第2次輸入代替への進化と輸出指向工業化の同時進展をねらったものであるとし、このような政策のもとで国有企業が肥大化し対外債務が累積したと議論する。そして、アキノ政権が IMF・世界銀行の意向にかなうかたちで構造調整プログラムを受け入れたため、財政緊縮政策を強いられ、いっそうの経済的停滞を導いたとの結論に達している。吉原 [1994] は、1980年代になぜフィリピンとタイがまったく相反する工業化

の軌跡をたどることになったのか、その諸要因を、華人系・外資系資本の役割などの経済的要素のほか、市場経済への政府の介入や治安問題などの非経済的要素をも重視しながら分析した労作である。フィリピンでは、独立後のアメリカとの特殊な政治・軍事・経済関係が、国内経済に大きな影響を与えてきた。この意味で、冷戦構造が瓦解した今、かつてとは異なる国際環境の中でフィリピン経済がどのように再生するのか興味深い。

個別テーマ別では、産業政策に関するレビューとして野原 [1987] と藤森 [1990] がある。また藤森 [1989] は、輸入代替産業である自動車産業と家電産業を事例に、加工組立産業の技能形成のフィリピンの諸条件を分析し、藤森 [1991b] は、輸出産業の半導体産業とアパレル産業を例にとり、フィリピンの保護主義的産業政策を再検討している。

小池 [1991, 1993, 1994] は、一連のフィリピン財閥経営研究の成果である。アキノ政権下のクローニー（マルコス政権下に形成された特権的経済集団）解体政策の中でアヤラ財閥が展開した経営の多角化、ロベス財閥の復活、急成長する華人・華僑系財閥などの動静が克明に追跡されている。とくに華人・華僑系財閥は、フィリピン経済復興の鍵を握る勢力として近年着目されており、今後の研究の深化が期待される。

財政・金融分野にもいくつかの業績がある。はじめにマクロ経済分析として伊藤 [1988]、高阪 [1992]、奥田 [1993] をあげたい。伊藤 [1988] は、財政赤字と累積債務を抱えるフィリピンがとるべき財政政策のあり方を一般均衡モデルを用いて検討し、高阪 [1992] は、1980年代の経済危機の中で露呈した金融システムの

弱点がマクロ経済政策との相互作用の中でどのようなかたちをとってきたのかを明らかにしたうえで、健全な金融システム育成のための方策を模索している。奥田 [1993] は、1980年代におけるフィリピンの金融自由化政策と政策金融の評価を行ない、問題点として(1)長期資金の減少、(2)農村金融の停滞、(3)輸出金融の未整備、(4)厳しい外為管理、の4点を指摘している。

野沢 [1993, 1994] は、ラモス政権下に急速な進展をみせている金融改革を、新中央銀行法と外国銀行自由化法の2側面から分析した論考である。政府系銀行および民間銀行の活性化は、政府の産業政策の自由化と相まって、フィリピンの経済再建に必須の要件であり、重要な研究テーマである。

また、経済史の分野から金融・銀行業に接近した研究に、永野 [1992, 1994] がある。永野は『フィリピン経済史研究——糖業資本と地主制』（勁草書房 1986年）で展開した問題意識を継承し、アメリカ植民地期に輸出経済の発展の鍵を握っていた政策金融の特徴を分析している。1920～30年代に確立する政策金融時代が、商業金融時代へと移行するのは50～60年代のことであり、今後、現代フィリピン金融構造との接点が模索されることになろう。

農業・農村経済研究の分野では、永年の研究業績をとりまとめた2冊の著作がある。まず、梅原 [1992] は、1960年代半ばから80年代末にいたる20数年の、フィリピン農業と農村構造に関する調査研究の集大成である。同書は、1970年代に「緑の革命」の名のもとで高収量品種が導入された結果、60年代まで存在した「伝統的」稲作農村がいかなる構造変化を遂げたのか

を明らかにし、今日のフィリピン農村が抱える社会経済問題の根源を提示している。とくに第5～9章は同書の核心部分にあたり、中部ルソン地方ヌエバ・エシハ州、南部ルソン地方ラグナ州、パナイ島イロイロ州の3地域4カ村でのフィールド調査の成果が収録されている。なかでも、ヌエバ・エシハ州のハシエンダ・バリオの調査は高い評価を受けたものである。

滝川 [1994] は、『戦後フィリピン農地改革論』（アジア経済研究所 1976年）に続く、著者のフィリピン農業・農村経済研究の集成である。ここに収録された論文は、主として、『戦後フィリピン農地改革論』の出版以降に発表された、フィリピンの農地改革や稲作農村社会の変化に関する論考であるが、日本におけるフィリピン土地制度史研究の出発点となった「フィリピン土地制度史序説」（1963年）や、滝川が永年、農地改革研究に従事する場合の理論的支柱となる考えを提示した「現代アジアにおける土地改革の基本性格に関する一考察」（1968年）も収録されている。この意味で、同書は、たんにフィリピンにとどまらず、東南アジア農業・農村問題全般に対する滝川の探究の賜物とも言えよう。

他方、フィリピンを事例に発展途上国の農地改革の新しいパラダイムを模索した研究として、速水；Quisumbing；Adriano [1990] があげられる。同書は、フィリピンのように政府に十分な行政能力がそなわっておらず、また、農園労働者や土地なし層が農村に滞留している社会では、農地改革に対する政府の関与を最小限にとどめ、小作関係に関する規定を撤廃して、土地なし層への土地へのアクセスを可能にする必要性を論じたものである。さらに、同書は、フィリピン農村経済構造とその発展史の研究として

広いカバレッジをもっており、他の途上国との比較研究としても有益である。

このほか、「緑の革命」と農地改革が稲作農村に与えた影響を評価した論文に、大塚 [1988]、福井 [1991]、西村 [1992] がある。大塚 [1988] は、農地改革の進展に地域的相違がみられる経済的背景を探りながら、農地改革の所得再配分効果を数量的に評価し、福井 [1991] は、農村の所得分配と所得水準の変化を通して「緑の革命」が経済的厚生に与える影響を推計している。これに対して西村 [1992] は、農地改革の対象となった、ヌエバ・エシハ州のハシエンダ・バリオにおける、農民と多国籍企業との野菜契約栽培が農村社会構造に与えた影響を分析している。

速水；Quisumbing；Adriano [1990] が示唆するように、「緑の革命」と農地改革のもとで、フィリピンの稲作農村では1980年代に農民層内部で複雑な階層分化が進行した。梅原 [1994] は、近年の稲作農村調査に基づいて農地改革後の農村内階層分化の実態に接近している。また、アキノ政権下に展開された包括的農地改革計画の概要と実施過程については、野沢 [1989] の論考がある。

なお、1980年代半ばには、フィリピンの砂糖産業の拠点であり、大土地所有制のメッカでもあるネグロス島が、国際砂糖相場の暴落によって深刻な経済不況に見舞われた。日本ネグロス・キャンペーン委員会；西川編 [1991] は、ネグロス島の砂糖産業の衰退が砂糖キビ農園労働者に与えた影響を調査し、労働者の経済的自立に対するNGOの役割を分析した日比共同研究の成果である。こうした日本におけるNGO活動の高まりを背景として、永野 [1990] は、19

世紀後半以降のネグロス島の砂糖産業の発展と大土地所有制の展開過程を考察し、砂糖キビ農園労働者の貧困の歴史的背景を明らかにしている。

都市インフォーマル部門の研究では、中西 [1991] がすぐれている。ここで、中西は、都市インフォーマル部門の市場が非競争的であることに着目し、都市インフォーマル部門をひとつの集合体としてとらえ、その市場が競争的であるとしてきた従来の理論的枠組の修正を試みる。すなわち、N・V・ジャガナタン (N. Vijay Jagannathan) が「暗黙の契約」関係によって規定される社会集団システムとしての都市インフォーマル部門を高く評価するのに対して、中西は、都市インフォーマル部門の市場が、出身地別の経済圏に基づく社会的行動諸関係によって分断されているために非効率性が生じていると主張する。そして、都市インフォーマル部門を対象とする政策は、「暗黙の契約」に基づく社会的行動諸関係を弱体化させる方向に進むべきである、との政策提言を導くにいたっている。このほか、途上国スラム比較研究の一環として実施された、マニラ・スラム調査の報告に新田目 [1989] があり、社会不安誘発型や停滞型のスラムが増大した場合の、社会運動の顕在化に関心が寄せられている。

小規模経営の分野では、佐竹 [1993] が、家内工業の事例として鍛冶業を取り上げ、中小・家内工業の内発的発展の可能性を模索している。鳥飼 [1993 a, 1993 b] は、スルー諸島やパラワン島での調査をもとに、伝統的部門としての漁業の雇用吸収力を吟味し、フロンティア開発のあり方に検討を加え、新しい研究領域を開拓しつつある。

海外出稼ぎ労働論には、桑原 [1990]、菊地 [1991]、藤森 [1991 a]、山形 [1991] がある。いずれも、海外出稼ぎ労働を生み出す経済的背景、海外雇用促進政策、出稼ぎ労働が国内経済に与える影響を概観したのとして有益である。実態調査に基づくケース・スタディの積み重ねが、今後の研究の発展の鍵となろう。

最後に、日比経済関係を軸とした援助論として、横山 [1990]、津田・横山編 [1992]、高橋 [1994] をあげたい。横山 [1990] は、構造的暴力の克服としての自力更生をひとつの理論的武器として、日本の対比援助とマルコス政権との癒着の実態を解明し、フィリピンの民衆運動と自力更生への道を展望したものである。また、ミンダナオの川崎製鉄を事例として、日系企業の経済進出の問題点をも鋭く指摘している。津田・横山編 [1992] は、1986年3月に米国下院アジア・太平洋外交小委員会が公表し、マルコス疑惑追及の端緒となった「マルコス文書」をはじめ、日本のODA（政府開発援助）とマルコス政権の癒着の実態を示した一次資料集である。高橋 [1994] は、戦後における日本の対フィリピン援助の変遷を振り返りながら、最近、日本のODAプログラムの中で、フィリピンのNGOとの協力が強められつつある点に着目し、参加型援助を促進するための提言を行なっている。

以上みてきたように、この間の経済・農業分野における研究は、1980年代にフィリピン経済が長期的停滞を経験した諸要因の分析とその再生への道を模索することを軸に展開された。なお、ここでは触れなかったが、(1)「環境と開発」・「ジェンダーと開発」など、地球環境保護や発展途上国の女性に関わる研究テーマに対しても関心が広がりつつあること、また、(2)ポ

スト冷戦時代を迎え、フィリピンが近隣アジア諸国との関係を深めつつある中で、「ASEAN経済圏の中のフィリピン」を意識した研究が近年急速に増加していること、の2点を最後に指摘しておく。そして、これからの日本のフィリピン研究の発展のためには、従来の日比両国の共同研究に加えて、アメリカ、オーストラリア、ヨーロッパ諸国の研究者との交流が一層促進される必要があることを付け加えたい。

## 〔文献リスト〕

- 浅野幸穂  
1992 『フィリピン——マルコスからアキノへ』（アジア現代史シリーズ2）アジア経済研究所。
- 浅野幸穂・福島光丘編  
1988 『アキノのフィリピン——混乱から再生へ』アジア経済研究所。
- 新田目夏実  
1989 「フィリピンのスラム——社会運動への可能性を秘めたスラムの一事例」新津晃一編『現代アジアのスラム——発展途上国都市の研究』明石書店：125-182。
- 池端雪浦  
1994 「フィリピン国民国家の創出」同編『変わる東南アジア史像』山川出版社：306-327。  
1991 「フィリピンにおける植民地支配とカトリシズム」石井米雄編『講座東南アジア学4 東南アジアの歴史』弘文堂：217-242。  
1987 『フィリピン革命とカトリシズム』勁草書房。
- 市川 誠  
1993 「フィリピンの公立学校における宗教教育、1901～87年——歴史的展開とカトリック教会の役割」『アジア経済』34(4) 1993.4：4-19。
- 伊藤正一  
1988 「フィリピンにおける財政分析のマクロ経済効果に関するCGE分析」『経済研究』[大阪府立大学] 33(2) 1988.3：175-194。
- 牛島巖；Zayas, Cynthia Neri編  
1994 *Fishers of the Visayas: Visayas Maritime Anthropological Studies*. Quezon City: College of Social Sciences and Philosophy, University of the Philippines.
- 梅原弘光  
1994 「フィリピン稲作農家の経営変化——中部ルソン平野の一村落調査事例をめぐって」『農業経営研究』[日本農業経営学会] 31(4) 1994.3：44-56。  
1992 『フィリピンの農村——その構造と変動』古今書院。
- 大崎正治  
1987 『フィリピン国 ポントック村——村は「くに」である』農山漁村文化協会。
- 大塚啓二郎  
1988 「フィリピン農地改革の公正と効率」速水佑次郎編『農業発展における市場メカニズムの再検討』アジア経済研究所：97-122。
- 大坪省三・池田正敏  
1987 「フィリピンのバランガイ——町内会類似最末端地方政府と住民の生活」太田勇・大坪省三・前田尚美編『東南アジアの地域社会——その政治・文化と居住環境』東洋大学：155-341。
- 大野拓司  
1986 *War Reparations & Peace Settlement: Philippines-Japan Relations 1945- 1956*. Manila: Solidaridad Publishing House.
- 奥田英信  
1993 「途上国の金融自由化政策と政策金融：フィリピンの事例研究」『一橋論叢』110



- (6) 1993.12: 23-39.
- 片山 裕  
1990 「アキノ政権下の行政改革」日本行政学会編『年報行政研究25 比較行政研究』: 149-173.  
1988 「フィリピンの政党と選挙——アキノ政権下の政党制」川端正久・的場敏博編『現代政治』法律文化社: 238-260.  
1987 「マルコス政権下の官僚制——とくに幹部公務員制度に焦点をあてて」矢野暢編『講座政治学Ⅳ 地域研究』三嶺書房: 223-246.
- 川島 緑  
1993 「戦後フィリピンにおけるイスラーム団体の発展——モロ国民主義に先行する政治的潮流」『アジア研究』39(4) 1993. 8: 85-130.  
1992 「南部フィリピンにおける公選制の導入——ムスリム社会の構造的変化をめぐって」『東南アジア——歴史と文化』(21): 116-141.
- 川田牧人  
1992 「島のうちとそと——フィリピン・ピサヤ小島漁業展開誌」『民族学研究』57(3) 1992.12: 345-357.
- 菊地京子  
1991 「フィリピンからの国際労働力移動」『社会科学討究』[早稲田大学] 36(3) 1991.3: 87-109.
- 菊地 靖編  
1989 *Philippine Kinship and Society*. Quezon City: New Day.
- 木村昌孝  
1989 “The Revolution and Realignment of Political Parties in the Philippines (December 1985-January 1988): With a Case in the Province of Batangas.”『東南アジア研究』27(3) 1989.12: 352-379.
- 桑原靖夫  
1990 「アジアにおける国際労働力移動の一断面——フィリピン経済と海外出稼労働者」『日本労働研究雑誌』(373) 1990. 11: 28-47.
- 小池賢治  
1994 「華人企業グループの対フィリピン投資」『アジアトレンド』(68) 1994.12: 20-32.  
1993 「フィリピンの財閥——財閥の政治化現象とその帰結」小池賢治・星野妙子編『発展途上国のビジネスグループ』アジア経済研究所: 189-212.  
1991 「アキノ政権下のアヤラ財閥——多角化の新展開と所有経営構造の変化」『アジア経済』32(11) 1991.11: 60-84.
- 高阪 章  
1992 「フィリピンの金融システムとマクロ経済の安定性」『東南アジア研究』30(1) 1992.6: 37-58.
- 合田 涛  
1986 『首狩りと言霊——フィリピン・ボントック族の社会構造と世界観』弘文堂.
- 坂井秀吉; カンラス, ダンテ・B.編  
1990 『フィリピンの経済開発と開発政策』アジア経済研究所.
- 坂井秀吉; モンテス, M. F.編  
1989 『フィリピンの開発政策とマクロ経済展望』アジア経済研究所.
- 佐竹真明  
1993 「フィリピンの家内工業——バタンガス州パウアン町の鍛冶業」『アジア経済』34(4) 1993.4: 59-83.
- 清水 展  
1991 『文化の中の政治——フィリピン「二月革命」の物語』弘文堂.  
1990 『出来事の民族誌——フィリピン・ネグリート社会の変化と持続』九州大学出版会.

白石 隆

- 1987 「上からの国家建設—— タイ、インドネシア、フィリピン」日本国際政治学会編『国際政治84——アジアの民族と国家：東南アジアを中心として』：27-43.

鈴木静夫

- 1989 「フィリピンの『脱亜入欧』と国語運動」岡部達味編『ASEANにおける国民統合と地域統合』日本国際問題研究所：85-114.

高橋 彰

- 1992 「フィリピン—— 混迷と希求と」東京大学社会科学研究所編『現代日本社会3 国際比較 [2]』東京大学出版会：417-449.
- 1994 「フィリピン援助論」『アジアトレンド』(68) 1994.12：45-56.

滝川 勉

- 1994 『東南アジア農業問題論—— 序説的・歴史的考察』勁草書房.

田巻松雄

- 1993 『フィリピンの権威主義体制と民主化』国際書院.

玉置泰明

- 1990 「農民と少数民族の組織化—— フィリピン社会の民主化の基盤として」『人文学報』[東京都立大学] (219) 1990.3：103-127.
- 1989 「社会関係としてのキリスト教—— フィリピン低地農村における世俗化と変容」『南方文化』(16) 1989.11：57-88.

津田守・横山正樹編

- 1992 『日本・フィリピン政治経済関係資料集—— マルコス文書、アキノ証言集および関連文書選』明石書店.

寺田勇文

- 1991 「外来と土着—— フィリピンにおける民衆カトリシズム世界」前田成文編『講座東南アジア学5 東南アジアの文化』弘文堂：69-92.

寺田勇文編

- 1989 『フィリピンの宗教と社会』鹿児島大学南太平洋海域研究センター.

床呂郁哉

- 1992 「海のエスノヒストリー—— スルー諸島における歴史とエスニシティー」『民族学研究』57(1) 1992.6：1-17.

鳥飼行博

- 1993 a 「フィリピンのフロンティア開発—— パラワン州にみる国内移住と支村の形成」『東南アジア研究』31(3) 1993.12：255-284.
- 1993 b 「フィリピン漁業の雇用吸収力とアングラ経済—— 伝統的部門における個人経営体の役割」『アジア経済』34(1) 1993.1：60-79.

中西 徹

- 1991 『スラムの経済学—— フィリピンにおける都市インフォーマル部門』東京大学出版会.

中野 聡

- 1994 「米国のフィリピン再占領—— 封じ込められた自主変革の契機と『親米』国家への道」油井大三郎・中村政則・豊下梢彦編『占領改革の国際比較—— 日本・アジア・ヨーロッパ』三省堂：27-55.
- 1991 「ナショナリズムと“ウインドフォール・メンタリティ”—— コモンウェルス政府財政問題をめぐる米比関係(1935-41)」伊藤利勝他編『東南アジアのナショナリズムにおける都市と農村』(AA研東南アジア研究第2巻)東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所：99-150.

永野善子

- 1994 「フィリピン政府農業銀行(1908~16)の設立とその運営—— 地主偏重型融資への道」『アジア研究』40(4) 1994.7：1-40.
- 1992 「アメリカ植民地期フィリピン銀行資本

- の諸類型』『アジア経済』33(10) 1992.10: 20-37.
- 1990 『砂糖アシエンダと貧困——フィリピン・ネグロス島小史』勁草書房.
- 西村 知  
1992 「フィリピンの農業商業化の展開——野菜契約栽培の展開と農村構造の変化」『経済論究』[九州大学](83) 1992.7: 75-104.
- 日本ネグロス・キャンペーン委員会; 西川潤編  
1991 『援助と自立——ネグロス島の経験から』同文館.
- 日本のフィリピン占領期に関する調査フォーラム編  
1994 『インタビュー記録——日本のフィリピン占領』龍溪書舎.
- 野沢勝美  
1994 「投資誘致を優先させた外国銀行自由化法」『アジアトレンド』(68) 1994.12: 4-19.
- 1993 「フィリピン新中央銀行法と金融改革」『アジアトレンド』(64) 1993.12: 76-97.
- 1989 「フィリピンの農地改革」『アジアトレンド』(48) 1989.11: 68-105.
- 野原 昂  
1987 「フィリピン」山澤逸平・平田章編『発展途上国の工業化と輸出促進政策』アジア経済研究所: 77-103.
- 早瀬晋三  
1992 「フィリピンの植民地開発と陸上交通網——アメリカ統治期の住民への影響」石井米雄・辛島昇・和田久徳編『東南アジア世界の歴史的位相』東京大学出版会: 200-224.
- 1989 『「ベンゲット移民」の虚像と実像——近代日本・東南アジア関係史の一考察』同文館.
- 1986 「ダバオ・フロンティアにおけるバゴボ族の社会変容」『アジア・アフリカ言語文化研究』[東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所](31) 1986.3: 96-119.
- 速水佑次郎; Quisumbing, Ma. Agnes R.; Adriano, Lourdes S.  
1990 *Toward an Alternative Land Reform Paradigm: A Philippine Perspective*. Quezon City: Ateneo de Manila University.
- バリサカン, アルセニオ・M.; 野沢勝美編  
1994 『フィリピン農村開発の構造と改革』アジア経済研究所.
- 福井清一  
1991 「フィリピン農地改革下における『緑の革命』と所得分配」『大阪大学経済学』41(2・3) 1991.12: 218-233.
- 福島光丘編  
1989 『フィリピンの工業化——再建への模索』アジア経済研究所.
- 藤森英男  
1991 a 「国際労働移動と国内経済へのインパクト——フィリピンの事例を中心として」『富大経済論集』36(3) 1991.3: 9-32.
- 1991 b 「フィリピンの輸出指向型工業化と産業政策——半導体, アパレル産業の事例」藤森英男編『アジア産業政策の事例研究』アジア経済研究所: 47-72.
- 1990 「フィリピンの産業政策」藤森英男編『アジア諸国の産業政策』アジア経済研究所: 105-142.
- 1989 「アキノ事件後におけるフィリピンの加工組立型産業と技能形成」尾高煌之助編『アジアの熟練——開発と人材育成』アジア経済研究所: 93-128.
- 藤原帰一  
1993 「フィリピンの政党政治——政党の消えた議会」村嶋英治・萩原宜之・岩崎育夫『ASEAN 諸国の政党政治』アジア経済研究所: 91-116.

- 1989 「フィリピン政治と開発行政」 福島編 [1989] : 39-61.
- 1988 「フィリピンにおける『民主主義』の制度と運動」『社会科学研究』[東京大学] 40(1) 1988.7 : 1-94.
- ホセ, リカルド・T.
- 1993 「日本のフィリピン支配の遺産」(後藤乾一訳) 細谷千博他編『太平洋戦争』東京大学出版会 : 511-537.
- 宮本 勝
- 1986 『ハヌノオ・マンヤン族——フィリピン山地民族の社会・宗教・法』(南島文化叢書8) 第一書房.
- 森澤恵子
- 1993 『現代フィリピン経済の構造』勁草書房.
- モンテス, M. F.; 小池賢治編
- 1988 『フィリピンの経済政策と企業』アジア経済研究所.
- 山影 進
- 1988 「フィリピン・ムスリムのナショナリティとエスニシティ」平野健一郎・山影進・岡部達味・土屋健治編『アジアにおける国民統合』東京大学出版会 : 189-224.
- 山形辰史
- 1991 「フィリピンの労働者の海外送り出し政策」『三田学会雑誌』83(特別号II) 1991.3 : 145-166.
- 横山正樹
- 1990 『フィリピン援助と自力更生論——構造的暴力の克服』明石書店.
- 吉川洋子
- 1992 『日比賠償外交交渉の研究』勁草書房.
- 1987 a 「フィリピンの政治的クライアントリズム——大統領の任命権と任命の政治過程」『東南アジア——歴史と文化』(16) 1987 : 37-75.
- 1987 b 「マルコス戒厳令体制の成立と崩壊——近代的家産制国家の出現」河野健二編『近代革命とアジア』名古屋大学出版会 : 53-118.
- 吉原久仁夫
- 1994 *The Nation and Economic Growth: The Philippines and Thailand.* Kuala Lumpur: Oxford University Press.
- リム, ジョセフ・Y.; 野沢勝美編
- 1993 『フィリピンの経済開発と地方分権政策』アジア経済研究所
- 1992 『フィリピンの規制緩和と政策』アジア経済研究所.
- 廖赤陽
- 1993 「フィリピン左派愛国華僑組織の変容」原不二夫編『東南アジア華僑と中国——中国帰属意識から華人意識へ』アジア経済研究所 : 27-75.
- (永野 : 神奈川大学外国語学部教授 / 川中 : アジア経済研究所動向分析部)